

ゆくのき通信 第5号 2009年6月



目次

虫こぶ	遠坂康彦	2
理学部植物園の驚異	中務哲郎	5
おもしろノート (1)		
やはり蔓は動きました	小吹和男	6
世界の生態植物園探訪 (2)		
カメルーンの熱帯雨林での植物調査：ハーバリウムから生態植物園へ	大石高典	7
ボクの植物園	BIN	10
【特集】第一回京大植物園句会報告		
投句一覧		12-13
講評	金久美智子	14
第五回「京大植物園便り」		
夢の森へ	中島和秀	15
編集後記		16

表紙画 寺田 晶英

シンボルイラスト かじわられいこ

虫こぶ

遠坂康彦

京都大学大学院理学研究科研修員

アブラムシという農業害虫として紹介されることが多く、人によってはゴキブリを思い浮かべる人もいて(ですので、一般の人にはなるべく“アリマキ”を使うようにしています)、悪いイメージを持たれがちな昆虫かと思われます。しかし、アブラムシは動物の75.9%以上を占める昆虫類の中でも5番目に種数の多い目に属しており、生態も多種多様で非常におもしろい生物です。例えば、メスだけで子どもを産む単為生殖、兵隊アブラムシや掃除アブラムシなどの階級分化、アリとの共生関係など。

私が研究しているアブラムシのグループは植物を操作して虫こぶ(研究者は“ゴール”と呼びます)を作らせます。虫こぶは植物の葉や芽に作られる文字通りこぶ状の物体であり、大きさは1cm程度のもの(写真1,3)から大きなものでは数十センチに至るもの(写真2)まであります。



写真1 ヤノイスアブラムシのゴール



写真2 タケノウチエゴアブラムシ



写真3 ヤノイスアブラムシと近縁と思われる未記載種の虫こぶ

アブラムシの場合、虫こぶの中は空洞でアブラムシはここで暮らすため、虫こぶはテントウムシやカゲロウの幼虫などの捕食者から身を守るシェルターとなっています。また、虫こぶは家であるとともに餌でもあります。アブラムシは虫こぶの内面の組織に口器を突き刺し、師管液を吸いますが、他の部位と比べ虫こぶの栄養成分が良質であるという研究報告もあります。アブラムシは植物を操作し、外敵から身を守り、かつ良質な餌で

もある快適な住居を作らせているということになります。虫こぶは人との生活に関わりを持つ物も多く、インクや染料の材料、医薬品や食料として利用されてきたそうです(薄葉 1995)。日本で有名な虫こぶは没食子と五倍子です。前者はアブラムシではなくハチによって作られた虫こぶで、正倉院に残っており古くから世界中で主にインクや染料の材料として使用されてきたようです。後者はヌルデシロアブラムシによるもので、日本では染料の材料として使われていたとのことです。このアブラムシと近縁のヤノイスアブラムシ(以下ヤノイス)を主に私は研究しています。ヤノイスはイスノキに虫こぶ(写真1)を作りますが、寄主であるイスノキは古くから日本では垣根などに利用されていたため、この虫こぶも比較的昔からよく知られていたようです。イスノキをよく見てみるとこの虫こぶがたくさんついている葉とあまりついていない葉があります。

私の大学院修士課程の時の研究テーマは、「虫こぶが多く作られる葉と作られない葉には何か法則があるのか?あるとしたらその原因は何か?」というものでした。まず、どのような場所に虫こぶを作るとたくさんの子供を産むことができるかどうか調べてみました。生物にとって多くの子供を産むことは重要な事であり、いい場所があればそこに多くの虫こぶが作られるはずと考えたわけです。ヤノイスの虫こぶはその年新しく伸びた枝(「当年枝」や「シュート」と呼びます)の葉に虫こぶを作ります。イスノキは平

均して1つのシュートに4枚の葉をつけます。どの葉で多くの子供を産んでいるか調べたところ、枝の先端よりも枝の基部の葉がよさそうな傾向が見られました(図1)。

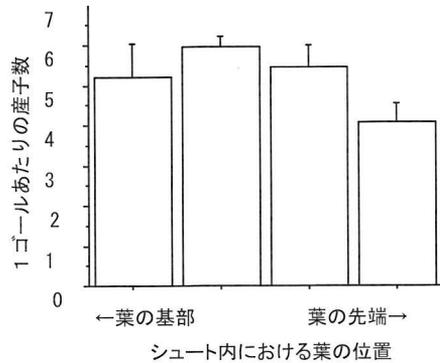


図1 シュート内におけるゴールが作られた葉の位置と産子数の関係

また、虫こぶの分布を調べたところ、葉の基部に虫こぶが集中しており、これは一見つじつまが合うように思えます(図2)。

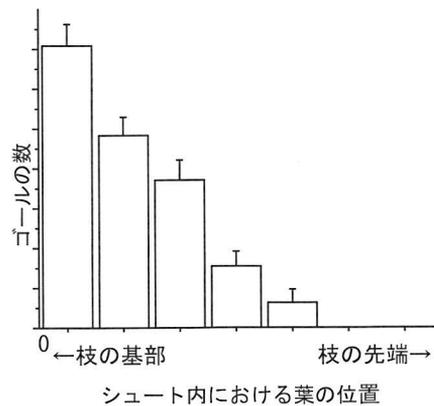


図2 シュート内におけるゴールの分布(2002年)

ところが、私はこの結果を見ても納得しませんでした。グラフだけ見ると各葉の間で差があるように見えますが、統計学的にはそんなに大きな差はみとめられなかったからです。そこで、年や場所を変えてゴールの分布を調べたところ、枝の真ん中の葉に虫こぶが多く見られたり、先端に見られたりする(図3)結果が見られました。どうやら必ずしも枝の基部の葉に虫こぶを作ればいいというわけではないようです。

次に着目したのがアブラムシが虫こぶを作る時期です。虫こぶは3月下旬の芽が開き始めた直後に作られます。イスノキの葉は5~7cmほどまで大きくなりますが、芽の大きさが1cm程度まで開いた時点でもう虫こぶを作ることはできなくなります。幹母はこの限られた短い時間の間に孵化し、虫こぶを作り始めなくてはならないのです。

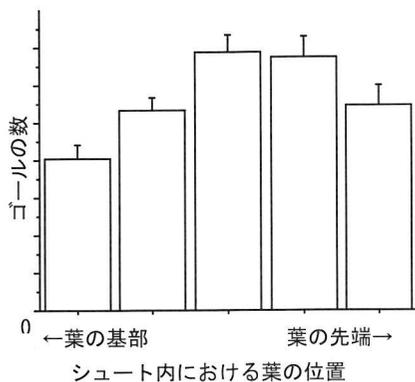


図3 シュート内におけるゴールの分布 (1999年)

1枚の葉に着目して早く虫こぶを作り始めた母親と遅れて虫こぶを作り始めた母親

の子供の数を比べたところ、虫こぶを作る時期が早いほど多くの子供を育てられることがわかりました(図4)。こちらの結果は統計学的に大きな差があるという結果が得られました。葉がなるべく若いうちに虫こぶを作り始めるのがいいと解釈できます。

年によって枝の基部に虫こぶが多く作られたり、先端に多く作られるのは、年によってイスノキの芽吹きとヤノイスの孵化の時期がずれることが原因であることがこの後の調査でわかりました。

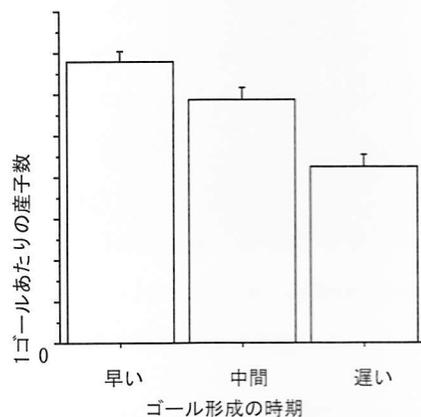


図4 虫こぶ(ゴール)を形成する時期と産子数の関係

孵化のほうが早く、芽吹きが遅いと図2のようになり、芽吹きが早く、孵化が遅れると若い葉は枝の先端にしかないのそこにあブラムシが集中して図3のようになるわけです。わずか0.5mmの虫ですが、葉の質をきちんと見極めて自分の家を建てる場所を的確に選んでいるわけです。また、この時

間の制約は相当シビアなようで、せっかく家を造り始めた母親を後からきた別の母親が胴を驚づかみにして引っこ抜き、場所を横取りする姿もよく見られます。

害虫として嫌われ、注意しないと見落としてしまうアブラムシですが、虫こぶ作りのちよつとしたことに目を向けただけでも、かなり複雑な行動をしていることがおわかりいただけたかと思います。紙面の都合上今回は紹介できませんが、他にも興味深い行動が山のようにありますし、これからも発見されていくことと思われまふ。一寸の虫にも五分の魂ということわざがありますが、小さなありふれた虫たちにも少し興味を持って眺めてみていただけると、色々と驚かされる発見をすることができると思います。自然が豊かで、日常生活圏で気軽にこのような生物達に数多く触れられる京都は、本当に恵まれた街だと思ひます。

引用文献

薄葉重 (1995) 「虫こぶ入門」八坂書房、東京

理学部植物園の驚異

中務哲郎

京都大学大学院文学研究科

京都大学の中に理学部植物園のような素晴らしい場所があることを知ったのはいつのことか、誰から教えられたのであつたか、

今となつては思ひ出せないが、30年以上も昔のことであるのは間違ひない。吉田二本松町の下宿で不規則な学生生活を送つていた頃、稀に早起きして、味爽の氣に誘われ植物園まで散歩の足を伸ばし、築山から現れた十数匹の野犬の群れに取り囲まれたことがあつた。秋にはゴム手袋をしてオニグルミの実を拾う職員も見かけた。

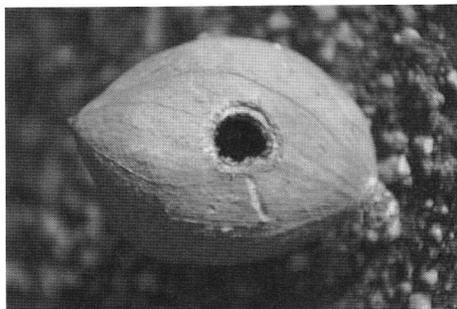
1987年に助教授として文学部に着任した頃、最も繁く植物園を訪れた。今出川通りの食堂で昼食をとると、必ずここに来て散歩するのである。ところが、いつの頃よりか大学の業務がひたすら忙しくなつて行き、昼時に食堂へ行くことができず、従つて植物園に回ることもなくなつたのである。それが再び植物園との縁が深まることになつたのには、あるきっかけがあつた。

一乗寺に住んでいた頃、自転車ですぐに通う道筋は決まっていた。秋になると大輪の菊の鉢を玄関先に並べて通行人を楽しませて下さる家がある、その前を夏も冬も通るのである。その家の主をお見かけして、話しかけたことがあつた。その方は白川疎水に螢を甦らせる活動をしておられ、螢の幼虫は川蝨(カワニナ)を食う、川蝨はある種の藻を好むが、ここにはないのでイヌビワの葉で養う、ところがイヌビワの木は近辺には少ないのだ、と。私は植物園にはあるに違ひないと思ひ、久しぶりに出かけてみた。そこには見知らぬ園丁がおられて、イヌビワの存否を尋ねると、門の近くに細葉の木が、池のほとりに丸葉の木が、とたちどころに答えて下さる。

掌を指すようにとはこのことかと、驚いたのがひとつ。

2002年10月、国東半島の岩倉社に伝わる火祭、ケベス祭の見学に出かけた折のこと、夜店で地元の婦人たちが作るヒョンの笛を見つけた。虫瘻のできたイスノキの葉の穴の回りに目鼻を描き、お猿さんの顔にしてニス塗ったもので、小さいのが500円、大きいものは1000円であった。子供たちのためにと二つ買い求めたものの、山で拾えるものにお金を出すのも馬鹿馬鹿しい、京都に戻ったら見つけようと考えた。私は山へ行く代わりに植物園に出かけ、木を探す代わりに先の園丁を求めた。そして尋ねると、どこそこに3本と、またも間髪を容れず教えて下さる。二度目の驚きである。

植物園を歩くうちに植物や虫の様々な不思議に出会ったが、園丁中島さんは私にとってそれ以上に大きな驚きであった。そしてその方から植物園の窮状を訴えられ、「植物園を考える会」に引き合わされて今日に至っている。



植物園のイスノキの葉の虫こぶ

おもしろノート(1)

やはり蔓は動きました

小吹和男

日本自然保護協会自然観察指導員

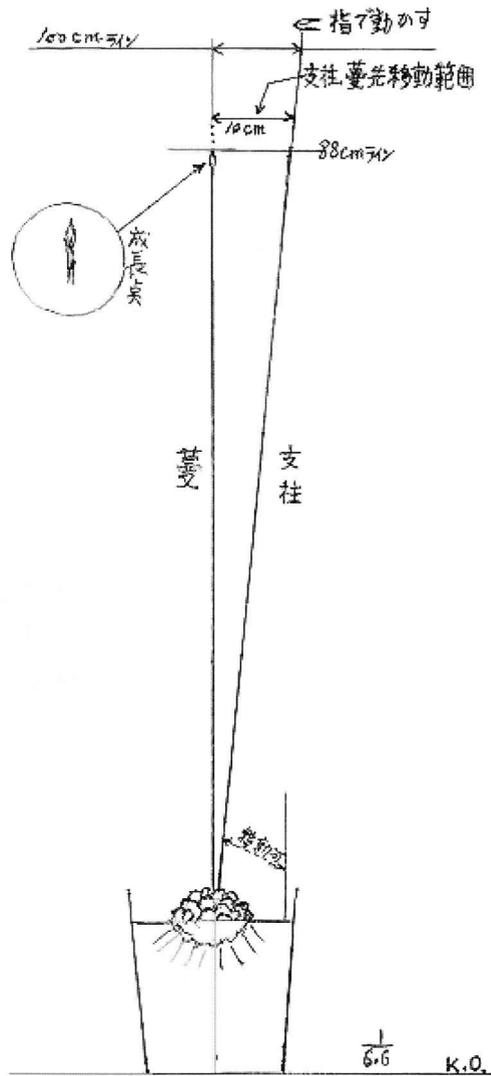
面白いという言葉は、とても面白い。面白いには、人の心を明るく、笑いを誘われる時の標準型「面白い」と、何か新しい事物、現象、発想や美に出会った時の感嘆的「面白い」もあって、日本の文化を高める力になっている。

小学生時代の夏休みに、よく朝顔の日記をつけたが、夜な夜な伸びる蔓達が、朝にはそれぞれ支柱にしっかり巻きついている事が不思議でならなかった。勿論、共存する植物が多い自然環境における朝顔は偶然の手掛りを期待してよかろうが、他の植物等が少ない環境に生まれた朝顔の蔓は、寄り掛かる対象なく、ついには倒れることとなる。しかし、蔓性植物の生き方はそんな無思慮なものであろうか。いや、私は彼等がある種の方向感知能力を具えているように思えてならなかった。しかし、未だに一般には偶然の手掛り説が語られているようである。

そこで、2006年秋、私は実験を試みた。材料は、生涯の趣味である多肉植物に属する南アフリカ原産のヤマノイモ科で、日本のツクネイモの仲間 *Testudinaria elephantipes* の特性である。夏の休眠期を過ぎ、9月に入ると岩のような塊根か

ら細く丈夫な蔓を垂直に伸ばし始め、1m位は直立可能で、弾力性が強い。

私はそのしなやかさを利用して、蔓が手掛りを探るセンサー的能力を持っているのかを調べてみた。蔓の高さは当時88cm、基部の径7mm。勿論、径21cmの鉢植え。室内を無風状態に保ち、鉢を中央に置く。直立する蔓と平行に園芸用支柱を立てる。そこで両者との間隔を変えながら、塊根上88cmの蔓の反応を観察した。直立限界に近く、手掛りを求め蔓はストレス一杯の筈である。そこで支柱との間隔を1cm~10cmと変えてみる……、と1~2cm以内では柔らかい成長部がツツと吸い着いた。これは私の予想に蔓が答えをくれた最も面白い現象となった。次に、それ以上の距離では徐々に蔓全体が傾いて支柱に到るが、更に離れると88cmの蔓のバネが働くのか、驚いたことにユレを伴って、時間と共に支柱に到達するという、これも大変面白い動きを見ることとなった。お恥ずかしい趣味の延長線上的な実験であるが、この超面白い「実見」の報告が、何かお役に立てばと思っている。



図：ツクネイモの方向感知能力試験

世界の生態植物園探訪 (2)

カメルーンの熱帯雨林での植物調査：ハーバリウムから生態植物園へ

大石高典

京都大学こころの未来研究センター

熱帯林調査とハーバリウム

カメルーンは、アフリカ中西部にある、47万5千平方キロたらずの国である。コンパクトな国土の中に、熱帯雨林から砂漠までの様々な生態系がみられ、250以上の言語を話す多民族状況にあるので、ミニ・アフリカ

と呼ばれることもある。至極大雑把に見ると、赤道に近い南半分の熱帯林地域とそれ以外のサバンナや砂漠に分けられる。

この熱帯林地域を中心に、1960年のフランスからの独立前はかなり早い時期から植物調査が行われてきた。特に、ギニア湾に面し、標高4千メートルを越えるカメルーン山の西側山麓や、経済の首都として栄えるドゥアラの街から数100キロ南にある南西部のカンボの森は、年平均降水量が5千から8千ミリを越える湿潤地で、熱帯植物の宝庫であることもあって手厚く保護されている。これらの森は、そこで見られる植物の多様性から、過去の氷期に何度もアフリカ大陸全体が寒冷乾燥化した時期にも熱帯林性の動植物のレフュジア（避難地）として機能したのではないかと考えられている。一方で、東部や南部に広がる熱帯林は、外資による熱帯林伐採のための森林という政策上の位置づけなのか、交通の便が不自由なせいもあって、現在に至るまで十分な植物調査が行われているとは言い難い。

カメルーンにおける植物学を語る時に決して忘れてはならないのはフランス人の故・ルネ・ルトゥゼ博士で、首都ヤウンデにある国立植物標本館（ハーバリウム）には彼の調査により集められた膨大な数の標本が保管されている。ルトゥゼ博士が1980年代までにまとめた調査以来、カメルーン全土をカバーした植生調査は行われておらず、特に湿潤熱帯林での植生調査の方法や植物をまとめたフィールドガイド "*Maual of*

Forest Botany: Tropical Africa"(1972)は今でもカメルーンの植物学専攻の学生のバイブルになっている。ハーバリウムで、自然保護プロジェクトや生物多様性研究のための植物の同定作業を担っている研究者や技官さんの中でもベテランの人々はルトゥゼ博士にしごかれて育てられたという。植物に限らず、直接お金を生むことのない博物学や自然史の分野では、人や資金が集まらず、植民地期に学術的な訓練を受けた職人的な人々によって、教育や研究のレベルが保たれているという側面は否めないようである。

この春、ヤウンデ大学の博士後期課程の学生さんとともに約3週間、カメルーン東南部の熱帯林に泊まりがけて植生調査を行う機会があった。サバンナ生まれの彼は、ルトゥゼ博士の孫弟子にあたる、熱帯林の植物社会学を専攻する数少ない研究者の一人である。彼の研究室では、植物系統分類学、植物生態学とともに民族植物学が重要な研究テーマに挙げられている。彼によれば、自然環境の変化に富んだ同国では、調査地に住み、植物と深い関わりをもった生活者が最も優れた植物学者なのであり、特定の植物について分からないことがあったらまず住民の中で植物に詳しい者に尋ねることから始めることも多いのだという。熱帯林の中で毎木調査を行うのに同定が必要なとき、大きな木ではとれあえぬ判断の材料は目の前にある樹幹しかないことが多い。民族語で名前が付いていれば、まずそれを聞く。低い所に枝があつたり、新鮮な落枝や花・果実があれば

よいが、ない場合は誰かアシスタントの村人に頼んで木登りをして葉の標本を採ってきてもらう。このいづれも困難な時にまずすることは、ナタで樹皮を削り、樹液の浸み出てくる様子や樹液の色、匂いを観察することであり、樹皮をしがんで味をみることである。これは、わからない植物に出会った時に村人が行っていることとほとんど同じである。これらの感覚的な情報を植物の外形特徴や生息場所などと組み合わせて、同定の輪を絞り込んでゆく。そのとき、調査者のそれまでの経験やセンスが問われる。科学者も民族科学者も、フィールドで未知の植物に素手でアクションするときにはできることは、五感をベースに知識を総動員するところから始めるしかない。



写真1：樹皮を剥いだ後数分間に起こった未同定のアリ植物"bambeki"(Baka 語)の色変化。

標本収集から生態植物園へ

カメルーンには、人文・芸術系の展示を行う博物館はあるが、自然史博物館がない。国立ヤウンデ大学理学部植物系統分類学・生態学研究室のンコメネック教授(Prof.

Bernard-Aloys Nkongmeneck)は、千年紀生態博物館(Millennium Ecologic Museum)と称するミニ博物館を立ち上げ、同僚に呼びかけて動植物を中心にカメルーン各地での研究の過程で採集された標本の展示・解説をはじめた。植物を用いて医療を行う実践者が集まりを持ったり、森もサバンナも知らないカメルーンの都市住民への環境教育のセンターも兼ねている。

ンコメネック教授は、ヤウンデ市の近郊の森に生態植物園(jardin ecologique)をつくるのが最近の具体的な目標の一つであった。ルトゥゼ博士の業績により、熱帯アフリカの植物学で知られた地でありながら、カメルーンの大学には研究林や植物園が一つとしてないのである。教授の言葉には、自然史研究の面白みを伝えるには、動植物や鉱物の標本の見本展示だけでは不十分で、学生や一般市民が主体的に森林の体験学習を行い、キャンパスからほど近い森の中で、さまざまな教育研究を行えるようにしたいとの願いがこもっていた。

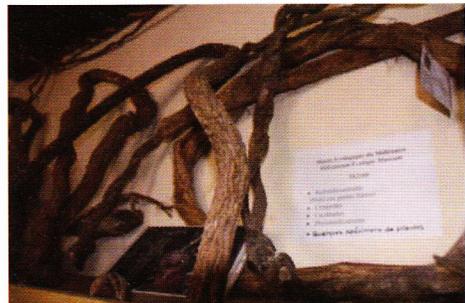


写真2：千年紀生態博物館のカメルーン各地のつるのコレクション。

ボクの植物園

B I N

代筆・玉岩重信（アース書房）

はじめまして、ボクはB I Nと云います。八才の男のネコです（あまり自分をネコだとは思っていないのですが）。ボクの名前は、「俊敏」になる様に名付けられたそうですが、「名は体を表していない」と同居人（ご主人？）は嘆いています。ボクの責任ではないのに...

ボク達は、植物園のすぐ南に住んでいますので、生まれてから殆ど毎日、植物園には散歩に出かけます。散歩だけではありません。△△もします（大も小も）。汚してご免なさい、中島さん。又、木登りしたり、時には獲物を持ち帰ることもあります。小さいトカゲや巣から落ちたスズメだけです（何せ俊敏ではないので）。先日も、チュンチュンを持ち帰り、遊ぼうと思っていたら、同居人に取り上げられてしまいました。ボクは、しばらく探して家の中を鳴きながらウロウロしましたが、すぐに、「どうでもいいや。」と思い、気分を換えて、ご飯を食べました。気分転換には食事が一番です。

こんな風に、植物園はボクにとって生活の一部ですが、何年か前に、植物園が失くなるかも知れない、と同居人が話しているのを聞いた時はビックリしました。ボク（ネコ）達にとって大切な場所である植物園の樹を切ったりして、人間って変なことを考えるんやなあ、ネコの

迷惑を考えてほしいと思いました。しかし、よく聞くと、それはごく一部の人間で、他の多くの人達はそれに反対している、と云うので安心しました。

そして「植物園を考える会」が作られ、その人達の粘り強い頑張りで、植物園が存続しているのは心強い限りです。（同居人は、あまり「考える会」に協力していない様で、まして最近は、いい年をして引き籠ったりしてダラしない奴です）。「考える会」は、植物園だけでなく、そこに通うボク（ネコ）達やトリや虫達が生きることを守ってくれています。

しかし、最近変なプレートを建てたりして、イヤガラセは収まっていない様です。「考える会」には、そんなことにはめげず、これからも頑張るって欲しいと思います。そうでないと、ボクが自由に遊べませんから。

追伸：ボクが植物園でイタズラしても、あまり怒らないでネ。



【特集】 第二回京大植物園句会報告

去る二〇〇八年一月二一日～二十四日にかけて、第六回京大植物園祭りを開催しました。二十四日午後、トリ企画として、「京大植物園句会」が開かれました。飛び入り参加も含め学内外の二十一名が、参加してくださいました。

ご協力いただいた俳句結社氷室俳句会からは、主宰である金久美智子先生をはじめ、同人である京都大学前総長尾池和夫さん、葉子さん、ご夫妻や吉田みゆきさんにご参加、ご指導をいただきました。雨のそぼ降る中、約一時間の植物園内での吟行（野外を歩きながら俳句など詩歌を吟じること）の後、北部キャンパス内の会場に場所を移して俳句会が行われました。投句（作った俳句の提出）前のわずかな時間には、歳時記や電子辞書などを引きながら最後の清書をする真剣な空気が流れました。同じ日の同じ時間の植物園から生まれた句であっても、参加者それぞれ目の付けどころの違いは興味深いものがあります。以下、当日投句された全作品と、金久先生による講評を掲載いたします。



☆第六回 京大植物園まつり概要☆

- 京大植物園写真展『続・植物園の四季 パート6』
一月二一日（金）～二四日（月祝） 北部キャンパス銀杏通り
- フリーマーケット
一月二二日（土） 北部キャンパス銀杏通り
- ライヴ&トークショー『森のヌシ神に捧ぐ・パート2』
一月二二日（土） 夕刻 北部キャンパス銀杏通り
- 出演：
くすきしんいち（シンガーソングライター）、
女子三楽坊（ウクレレ・フルート・ピアノ）、
久保田一（尺八独奏）
etc.（必殺！子連れバンド）、
鎌田東二（神道ソングライター）
- 植物園観察会スペシャル（第六八回京大植物園観察会）
一月二四日（月祝） 午前 テーマ：『ゆく秋を見る。』
案内人：小吹和男さん（日本自然保護協会自然観察指導員）
- 特別企画：植物園吟行と俳句会
一月二四日（月祝） 午後 協力：氷室俳句会

- 27 落葉敷く妻と娘笑みし冬の園 松本 完治
- 28 氷雨降る青春の園踏みしめる 服部 泰夫
- 29 綿の糸朽葉で染めて冬きたる 有元 高太
- 30 去年（こぞ）の種落ちて実りし鳥のには（入選） 久松 ユリ
- 31 長い廊下の奥まで入りし枯落葉 山下 信子
- 32 綿虫に傘をさしかけ雨宿り（特選） 尾池 和夫
- 33 すさまじや黄葉（もみじ）の山のくづるるは 金久美智子
- 34 ヌマスギの水面に映る森の主 影山 貴子
- 35 霜月を一人笑ふて超現実（シユール）哉 中島 和秀
- 36 天然の樹形の紅葉農学部 金久美智子
- 37 ポケットの団栗手ざわり染しみぬ 久松 ユリ
- 38 藪の中茶の花一つだけが咲き（入選） 仲摩 朋葉
- 39 時雨傘かたむけ拾ふ一と葉かな（入選） 吉田みゆき
- 40 時雨せり花柳幻舟恋の人 中島 和秀
- 41 草の実の名はちぢみざくつつきぬ 尾池 葉子
- 42 水音に身をすくませる冬の朝（入選） 有元 高太
- 43 削氷（けずりひ）のごとく窓打つ冬の雨 金久美智子
- 44 クリスマス待つひいらぎに冬の雨 小吹 和男
- 45 森守るひと居て勤労感謝の日（入選） 尾池 和夫
- 46 冬枯れにあらはれぬ笑顔幸湧かむ 松本 完治
- 47 父母恋しふかふか落葉踏みしめる 服部 泰夫
- 48 白々と雨に打たれて朴落葉（入選） 吉田みゆき
- 49 冬の池ただ静かなるたたずまい 大月 健
- 50 森清（すが）しあれは氷雨の命（みこと）かな 中島 和秀
- 51 メタセコイア時雨もよしと凜と立つ 大石 雅子
- 52 森満たす甘きにほひの濡れ落葉（入選） 大石 高典
- 53 農学部図書館の前枇杷の花（入選） 吉田みゆき
- 54 遺跡訪ひ断層踏まむ冬の雨 浅香すみ子

第一回 京大植物園句会投句一覧 (二〇〇八年十一月二四日)

- | | | | | | |
|----|----------------------|-------|----|----------------------|-------|
| 1 | 秋雨にビンボウヅルの夏終る | 小吹 和男 | 14 | 速達で送りし森のピンオーク | 山下 信子 |
| 2 | 木枯にゆれる柿の実忘れもの | 有元 高太 | 15 | 鶉鳥(ひよ)啼きて停年近し学には(入選) | 久松 ユリ |
| 3 | 森の雨落葉の色を浮き立たせ(入選) | 大石 雅子 | 16 | 寒空やチャンチンモドキの酒旨し | 影山 貴子 |
| 4 | 柿ひとつ園のしじまを守りをり(入選) | 浅香すみ子 | 17 | 冬の雨湯川桜はもたれけり | 仲摩 朋葉 |
| 5 | 湯川先生胸像に落葉降る | 尾池 葉子 | 18 | 冬枯れの落葉を乱す鳩も居ず | 吉川 徹朗 |
| 6 | 木枯しに遠い昭和の声を聞く | 服部 泰夫 | 19 | 水たまり波紋を投げて時は過ぐ | 吉川 徹朗 |
| 7 | 冬の雨ゆくの木の骨天を突く | 大月 健 | 20 | 冬の雨綿虫の背は濡れざるや(入選) | 仲摩 朋葉 |
| 8 | 見上ぐればペン画のごとき枯木かな(特選) | 尾池 和夫 | 21 | 握りしむ木の実三つ四つ農学部(特選) | 浅香すみ子 |
| 9 | 冬牡丹朽葉にふたつ妻と娘か | 松本 完治 | 22 | 理学部の背番号付け冬木立(入選) | 尾池 葉子 |
| 10 | この道は遠き昔の神渡(入選) | 影山 貴子 | 23 | ユクノキに鳥の空き巣つめた雨 | 小吹 和男 |
| 11 | 森の陰冷たい雨に照る椿 | 吉川 徹朗 | 24 | 弧を描き飛び立つ孤鷺冬ざるる | 大石 雅子 |
| 12 | 鍋を前にはじめて作る柚子胡椒 | 山下 信子 | 25 | 熱爛やドグラマグラが呼んでいる | 大石 高典 |
| 13 | つるつるとバナナを伝ふ冬の雨(特選) | 大石 高典 | 26 | 植物園いろはもみぢはまだ青く(入選) | 大月 健 |

講評

金久美智子
俳句結社『氷室』主宰

俳句を名乗るからには、季語だけは忘れずに、それに何年も俳句をしている人でも、季節を違えて覚えていたりですから、歳時記と仲良くなつて始終引く様に癖をつけましょう。

秋雨にビンボウツルの夏終る

小吹和男

始めの句で一夏中、野放図に蔓延っていた藪枯（ビンボウツルのことです。蔓延ると藪でも枯らすの意）も冷たい秋雨に弱りました。「夏終る」と上手く言われましたが、秋雨と、夏終わるとを並べると少々丁寧過ぎないでしょうか。

秋雨の一度に萎れ藪枯し

とするのは如何でしょう。

この道は遠き昔の神渡

影山貴子

神無月で神々が出雲に集まられると言う時期は俳句好みでよく詠まれますが、神様は空中をトンで集まられる様で、「この道」では違和感があります。

空青く遠き世よりの神渡

同じ方の句で面白かったのは、

炬燵してチャンチンモドキの酒旨し

影山貴子

私もチャンチンモドキを題材に作りましたのでお目に掛けます。

香椿か香椿もどきか黄葉せる

推敲をなさった句はみなきちんとした句の形を整えられました。とびとびですが、他の句にも触れてみましょう。

木枯らしにゆれる柿の実忘れもの

有元高太

よく面白い所目をつけられましたが、柿の木の梢にぼつんと取り残された柿を、「木守」と言い、沢山実を生して呉れたお札に木に残して置くもので、鳥など野鳥に食べてもらつて、柿の実の成仏するのを祈るのでしよう。

ただ、俳句には決まった約束事があります。それに注意するのと、景色や心を言葉に表すのが、文芸作品なので、言葉にしたときに、読者がその景を脳裏に再現出来てこそ、成功したと言えるのです。

木枯が過ぎて、柿の葉が吹き散り柿の実が一つぼつんと残っている景色ですね。木の葉を吹き散らすのが「木枯」ですから、木枯にゆれる柿の実は少々丁寧過ぎると思われませんか。「忘れもの」は何の忘れものでしょうか。何分、定型詩ですから、のんびりしていると、忽ち字数が品切れになります。一番言いたかったのは何かをもう一度問い返して、推敲するのが最上の方法でしょう。

同じ句を二方法で添削してみました。ご自分の言いたかったのはどちらが近いのでしょうか。

木守を一つ梢に忘れけり

木枯の吹き残したる忘れ柿

第五回「京大植物園便り」 夢の森へ

園丁 中島和秀

◎香椿擬酒（ちゃんちんもどきしゅ）の話

京大理学部植物園の正門を入ってすぐ右手に、樹高約二十五メートルの「チャンチンモドキ」の大本木が聳えて居ます。見上ぐれば頭上を覆うやうに、大枝がその腕を伸ばして日陰を作っています。蝉時雨の夏が過ぎ九月も下旬頃になると、うす緑色をした直径約二・五センチの丸い実が、ポタポタと年末まで大量に落下して来ます。何故かその実が体に当たる事はほとんどありません。朝一番に竹の熊手で、正門付近を掃除するのが日課ですが、その実を掃きながら今年もまた秋が巡って来たのだと、つくづくと思ふのです。

チャンチンモドキ（カナメノキ）はウルシ科の植物で、暖地の山中に稀に生える雌雄異株の落葉高木です。因みに皮膚に直接触れても、かぶれる事はありません。分布は暖帯・亜熱帯で、九州（鹿児島県・熊本県）、中国（広東・四川・雲南）、タイ、ヒマラヤ（ネパールまで）。当植物園の樹は九州より、そして一九五三年にネパールから、いづれもその種子を導入したものです。花は五月中旬に咲き、その果実は中国・ネパール等で食料になって居るさうです。数年前の初冬にネパールの女性がその実を拾いに来てゐて、立ち話をした事もなつかしい思ひ出です。

さて、当園では毎月一回「観察会」（京大植物園を考える会主催）が行われてゐて、この六月で七十五回を数へます。その催しによく参加されるK婦人は、果実酒を作るのを趣味の一つにされて居て、入り口付近に夥しく転がるチャンチンモドキの実に興味を持たれたらしいのです。生の果実のうす皮は指で簡単に剥く事が出来、果肉は白くゼリー状でネバネバとしてゐます。あじは甘酸っぱく（酸味が強い）少

しヤニ臭くて、好みは別かれるやうです。

その翌年の夏の「観察会」に、Kさんは大きなガラス製の容器にチャンチンモドキ酒を入れて、持参して下さいました。果実は青く若いものが良く、皮を剥かないでそのまま焼酎に漬け込むらしいのですが、詳しい作り方は秘伝らしく教えて貰えませんでした。有難く頂戴し、「考える会」の皆さん達と時折々に吞ませて頂きました。味は最上の果実酒の一種であると思われず。トロリとした何とも云わく云ひ難い優しい口当たりで、酸味と甘味が程よく調和し、色は美しい琥珀色で、上品な風味を醸す素敵な呑み物で、とても好評を博した次第です。

このやうに、珍しい自然の恵みの酒に浴せる事は、何ものにも換え難い幸せだと、しみじみと感謝した宵の事でした。

ネパールの風が伝へし酒さか楽 香椿擬の唄聴こゆかも

参考文献

- 保育社『原色日本植物図鑑』木本編（I）北村四郎・村田源 共著 一九七一年刊
- 『京大植物園名鑑』



香椿擬酒

編集後記

『ゆくのき通信』5号の発行が大幅に遅れてしまいました。申し訳ありません。

11月の《京大植物園祭り》は恒例になりました。昨年はちょっと趣向を変えて「京大植物園句会」を行いました。前総長で俳人の尾池和夫さんや句誌『氷室』主宰の金久美智子さんを迎えて、俄仕立ての俳人約20名が集まり植物園内を吟行、句作に頭をひねりました。小特集はその報告です。俄仕立てにしてはちゃんと俳句になっているから不思議です。皆さんがよい感性をもっている証左です。

この京大植物園句会が契機となって、『京大俳句』復刊準備会が作られました。成り行きとは面白いものです。戦前の第一次『京大俳句』は新興俳句運動の拠点として言論弾圧を招いています。戦後の第二次『京大俳句』は1964年から1983年までに53冊を刊行しています。年次的には『京大俳句』が復刊されてもいい時期だろうと思います。いま、句会をかさねながら雑誌の方向性を探っています。

わたし事になります。農学部を卒業してちょっと旅に出ています。観察会を手伝えないのが残念です。また、ふらり帰ります。その時には、目一杯お手伝いをさせて頂きます。

2009年5月8日 大月 健

Errata(正誤表): 吉川徹朗「秋の植物園の鳥たちと樹木」『ゆくのき通信』第3号(2007.12.)

- Page 2 図1のキャプション
図1 ヒヨドリ *Hypsipetes amaurotis* → *Hypsipetes amaurotis*
- Page 3 右下 図3のキャプション
(撮影: 梶田) → (撮影: 梶田学)
- Page 5 左列 23行目の引用文献を示す上付き文字 2)→3)
- Page 6 18-19行目
「そのひそやかな? しかし同様にたしかな?」 → 「そのひそやかな - しかし同様にたしかな -」
(クエスチョンマークではなく、ハイフン)
- Page 6 引用文献に追加 (丸ごと抜け落ちている)
3) 中村登流・中村雅彦(1995) 原色日本野鳥生態図鑑・陸鳥編, 保育社, 東京

京大植物園を考える会ニュースレター

ゆくのき通信 第5号

発行: 2009年6月15日 京大植物園を考える会

印刷: 株式会社北斗プリント社

事務局: 〒606-8799 左京郵便局 私書箱5号「京大植物園を考える会」

URL: <http://members.at.infoseek.co.jp/bgarden/>

E-mail: kyotoubg@gmail.com